

『源氏物語』の落葉宮ほどの「小野」に移り住んだか

—— 岩戸落葉神社と三つの「小野」 ——

中 川 照 将

一 問題の所在

休日のを街を散歩していると、時折、骨董品市のようなイベントに出会うことがある。道ばたに広げられたシートの上には、さまざまな皿や壺などが並べられ、その中にはなかなか金額が書かれた値札が貼られているものもあつたりする。まさか、こんな道ばたに、価値のあるものがあるわけないと思いつつも、値札の値段を見てみると、もしかすると、素人のわたしが知らないだけで、本当はそれなりに由緒ある品なのかもしれないと思ってみたりする。

同じような感覚は、街の中にある石碑や建物を見た時にも起きたりする。いかにも古そうな石碑・建物であることは一見してわかるものの、その時点では、ただの石碑であり建物でしかない。しかし、それらにまつわるさまざまな伝承・伝説を知らされると、多少の疑いは残りつつも、なんとなく由緒ありげなもののように思えてきたりする。

『源氏物語』の舞台となっている京都には、『源氏物語』ゆかりの古跡とされているものが数多くある。その中に

『源氏物語』の落葉宮ほどの「小野」に移り住んだか（中川）

は、作品中に地名・建物名が明記されている確実なゆかりもあれば、明らかにいかがわしいゆかりもある。特に有名なのは、夕顔巻で物の怪に取り殺された夕顔の墓(一)や、蜻蛉石などの宇治十帖の古跡(二)であろう。しかし、書店で売られている『源氏物語』旅行ガイドブックのような書籍をパラパラとめくっていると、それ以外にも奇妙な古跡があることがわかる。それが、本論文で取り上げる岩戸落葉神社である。

『源氏物語を歩く』には、『源氏物語』の登場人物である落葉宮ゆかりの場所として、岩戸落葉神社が紹介されている。それによると、当神社は京都市北区小野岩戸にあり、JR京都駅からバスで約一時間五分かかる場所にあるとのこと。美しい写真も付けられており、いかにも『源氏物語』のゆかりの地らしい場所である。落葉宮とは、父は朱雀院、母は一条御息所。さまざまな事情があり、柏木の正妻となった女性である。さらに『源氏物語を歩く』には、次のような伝承が紹介されている。

落葉社は伝説によると、傷心の落葉の宮の隠棲地にちなんで祭られたといわれている。

〔横笛〕『文学歴史4 源氏物語を歩く』JTBパブリッシング 二〇〇八年 九二頁

ここで、ふと、ある違和感が生まれてくる。なぜなら、『源氏物語』では確かに落葉宮が「小野」に移り住んだと記されているものの、岩戸落葉神社がある「小野」に移り住んだとは記されていなかったはずだからである。落葉宮が「小野」に隠棲するのは夕霧巻のこと。夫柏木の死去により未亡人となった傷心の彼女は、母一条御息所とともに「小野」に隠棲した。そんな彼女のもとに、故柏木の親友であった夕霧が来訪し、恋心を打ち明けるのであった……といった感じで物語が展開する。次節で詳述するように、現在の通説では、この夕霧巻に描かれる「小野」は、愛宕郡の「小野」(現左京区)を指すものとなっている。少なくとも、右の伝説のような解釈は見られない。

岩戸落葉神社に関しては、さらに別の奇妙な伝承もあったようである。加納重文は、江戸時代の地誌『山州名跡志』に書かれた次のような伝承を紹介している。

『山州名跡志』(巻六)の記述するところでは、落葉宮なる小祠が、「下村民居良一町」に所在するそうである。女三宮の靈を祀るというのも理屈に合わず、地名も見当付かない。冗談半分に紹介。

(加納重文「小野と比叡山」『源氏物語の舞台を訪ねて』宮帯出版社 二〇一一年 二九〇頁)

『山州名跡志』によると、この神社には、落葉宮ではなく、彼女の腹違いの妹である女三宮を祭神とする伝承もあつたらしい。女三宮とは、落葉宮の夫柏木と密通を犯してしまった女性で、『源氏物語』の中でも特に有名な登場人物の一人である。今述べた説明からもわかるように、落葉宮と女三宮は明らかに別人物である。しかし、『山州名跡志』の伝説は、柏木の正妻である姉落葉宮と、柏木に激しく恋慕され密通事件にまで巻き込まれてしまった悲劇のヒロイン妹女三宮を、同一人物として捉えていることがわかる。加納論文が、この伝承に触れるに際して「冗談半分に紹介」としているのも、そのためである。

このように岩戸落葉神社は、『源氏物語』ゆかりの地としてありながら、その「ゆかり」の説明を聞けば聞くほど、逆にいかがわしさが際立ってくる奇妙な古跡だと言える。ただ、わたしが気になるのは、次の点である。それは、そもそもなぜ、京都市北区のその土地に、『源氏物語』ゆかりの地が生まれたのか。そして、その地が、『源氏物語』ゆかりの地であると考えられるようになった、その根拠と論理はどういうものであったのか、ということなのである。

改めて述べるまでもなく、岩戸落葉神社に伝わる言い伝えは、明らかに間違っている。当然のことながら、その言い伝えの根底にある『源氏物語』ゆかりの地としての根拠・論理も、明らかにいかがわしいものであるに違いない。ただ、わたしは、それが明らかにおかしいものであるがゆえに、逆に魅力を感じるのである。

『源氏物語』を解釈するに際して、昔の人たちはどういった情報を重要だと考え、そしてそれをどのように利用していたのか。岩戸落葉神社にまつわる伝承は、それが初歩的な誤りに基づくものであるがゆえに、逆に、当時の『源氏物語』に対するウブな感覚や姿勢を映し出していると考ええるからである。

次節では、岩戸落葉神社の伝承がいかにいかがわしいものであるかを正確に把握するために、現在の研究の成果を確認することからはじめてみたい。

二 「小野」をめぐる現代の諸注釈書の理解——愛宕郡「小野」

夕霧巻で、落葉宮が移り住んだ「小野」、そして彼女が移り住んだ山荘は「小野」の中のどのあたりにあったのか。この問題について、日本古典文学全集の頭注には次のような解説が付けられている。

A 山城国愛宕郡小野郷（和名抄）。B 現在この地名は京都市左京区上高野小野町にその遺称をとどめる。一乗寺修学院から北にかけて八瀬・大原方面まで延び、鞍馬山の麓までを含む一帯であるが、Cこの山荘のあるのは修学院付近らしい。（日本古典文学全集『源氏物語4』小学館 一九七四年 夕霧・三八四頁・頭注四）

この解説は、現在広く流通している他の注釈書（日本古典文学大系・源氏物語評釈（玉上評釈）・新潮日本古典集成・新日本古典文学大系・新編日本古典文学全集・源氏物語鑑賞と基礎知識）にもほぼ共通して見られるものである。

まずは、この解説が、どういった情報に基づいているのかという基本的なところから確認する。

右の「小野」に関する解説は、A B Cの三つの情報から構成されている。Aは、『源氏物語』成立時における「小野」の情報である。

◆源順『和名類聚抄』卷第六「山城国第六十八」（承平「九三一〜八」年間）

愛宕郡 蓼倉（多天久良） 栗野（久留須乃） 上栗田（阿波多） 大野 下栗田 小野（乎乃） 錦部（尔之古

利)八坂(也佐加) 鳥部(止利倍) 愛宕(於多木) 出雲(以都毛、在上下) 賀茂

(国立国会図書館デジタルコレクション『倭名類聚鈔二〇卷(元和版古活字本)』 3「31/64」コマ)

ここで『和名類聚抄』を使いながら、「小野(郷)」という地名が『源氏物語』成立時に山城国愛宕郡(現左京区)に存在していたことを確認している。

Bは、『和名類聚抄』で確認した「小野」の範囲についての情報である。先の解説に「現在この地名は京都市左京区上高野小野町にその遺称をとどめる」と記されているように、現在「小野」の地名はわずかな形でしか残っていない。そこで、「小野」は、愛宕郡のどのあたりに存在していたのか、そしてその範囲はどれくらいであったかについて確認する必要がある。なお、先の解説にはBの情報の典拠は記されていないが、その記述内容から次の史料を踏まえているのではないかと推測される⁽³⁾。

◆松野元敬『扶桑京華志』卷之一「原野並森林附街衢」(寛文五「一六六五」年)

○小野 松崎カ以北至大原ニ。皆謂小野ト。 (『新修京都叢書22』臨川書店 一九七二年 六一頁)

◆浄慧『山城名跡巡行志』第三「愛宕郡三」(宝暦四「一七五四」年)

○小野 古ハ郷名也(小野村今高野)。小野ノ郷、松崎・山端(松崎出戸)以上大原静原ニ至皆小野ノ郷也。 (『新修京都叢書22』臨川書店 一九七二年 三二八頁)

ちなみに、『山城名跡巡行志』の解説には、「小野」に関して「古ハ郷名也」とある。この記述から、少なくとも『山城名跡巡行志』が作られた宝暦四年の時点においては、既に「小野」は消滅していることがわかる。この事実は、現在、「小野」の地名が(左京区)上高野小野町というわずかな形でしか残っていないこととも符合する。

『源氏物語』の落葉宮はどの「小野」に移り住んだか(中川)

Cは、落葉宮が身を寄せた「小野」の山荘の具体的な場所に関する情報である。Bの記述からもわかるように「小野」の範囲はかなり広い。それならば『源氏物語』夕霧巻において小野の山荘は「小野」の中のどのあたりにイメー
ジして描かれたものだったのかという問題が、当然のことながら浮かび上がってくるのである。

C「この山荘のあるのは修学院付近らしい」という解説は、『源氏物語』夕霧巻本文から読み取れる地理的特徴から導き出されたものである。この問題について、例えば、福嶋昭治は、物語本文に基づきながら落葉宮が移り住んだ山荘周辺の地理的特徴を六つ抽出している⁽⁴⁾。福嶋論文が指摘する特徴と対応する本文は、以下のとおりである。

特徴1 比叡山の麓である。

↓御息所（＝落葉宮の母一条御息所）、もののけにいたうわづらひたまひて、小野といふわたりに、山里持たまへるにわたりたまへり。
（新潮日本古典集成『源氏物語6』新潮社 一九八二年 夕霧・一二二頁）

特徴2 松ヶ崎の山の端を見渡すことのできる場所である。

↓（京から小野の山荘へ向かう道中は）ことに深き道ならねど、松が崎の尾山の色なども、さる巖ならねど、秋のけしきつきて、都に二なくと尽くしたる家居には、なほあはれも興もまさりてぞ見ゆるや。
（『同右』夕霧・一三〇四頁）

特徴3 山蔭ではあるがそれほど奥深い場所ではない。

↓日入りかたになりゆくに、（小野の山荘から見える）空のけしきもあはれに霧りわたりて、山の蔭は小暗きこちするに、ひぐらし鳴きしきりて、垣ほに生ふる撫子の、うちなびける色もをかしう見ゆ。
（『同右』夕霧・一七頁）

特徴4 瀧の音が聞こえる所である。

↓（落葉宮と夕霧が対面している小野の山荘では）風いと心細う、ふけゆく夜のけしき、虫の音も、鹿の鳴く音も、滝の音も、一つに乱れて艶なるほどなれば、……
（『同右』夕霧・二二二頁）

特徴5 栗栖野の莊園が近くにあり所である。

↓(夕霧は家来の左近將監に対して)「……今宵このわたり(小野の山莊)にとまりて、初夜の時果てむほどに、かのゐたるかたにもせむ。これかれさぶらはせよ。隨身などの男どもは、栗栖野の庄(夕霧の所領地)近からむ、秣などとり飼はせて、ここに人あまた声なせそ。……」とのたまふ。

(『同右』夕霧・一九頁)

特徴6 山籠もりの僧が山との間を行き来しても、差し支えの少ないところである。

↓(落葉宮の母一条御息所が小野の山莊に移り住むことを決めた理由は)早うより御祈りの師にて、もののけなど払ひ捨てける律師、山籠りして、里に出でじと誓ひたるを、麓近くて、請じおろしたまふゆゑなりけり。

(『同右』夕霧・一二二頁)

福嶋論文は、これらの六つの特徴と、実際の地形、歴史史料、発掘調査の結果などを照らし合わせた上で、小野の山莊が「修学院離宮・林丘寺・曼殊院の地域」を意識して描かれたものであると結論づける。先に引用した日本古典文学全集の解説にある「修学院付近」よりも範囲がやや広いものとなっているが、大きく異なるものではないと言える。なお、福嶋論文以外のものの中には、逆に「修学院付近」よりも狭い範囲を想定しているものも見受けられる⁽⁵⁾。そもそも『源氏物語』夕霧巻に描かれる小野の山莊が、どこまで具体的な場所をイメージして描かれているのかという問題もあるが、それらの論においても、論の前提部分に関しては変わらない。ここで述べるところの前提部分とは、まず夕霧巻の「小野」は、『源氏物語』成立時において「山城国愛宕郡(現左京区)」に確実に存在した地名であるということ。次に、その範囲は「一乗寺修学院から北にかけて八瀬・大原方面まで延び、鞍馬山の麓までを含む一帯」であるということ。そして、何よりも夕霧巻本文に見られる特徴1〜6のすべてを、これまで確認してきた「小野」のものとして捉えるということ、である。

ここで、わたしが「論の前提部分」にこだわるのには理由がある。『源氏物語』享受史を振り返ってみると、夕霧

卷の「小野」は、これまで見てきた愛宕郡の「小野」ではなく、別の「小野」であったとする説が存在していたことがわかるからである。結論から言えば、この愛宕郡の「小野」以外の「小野」の一つこそが、本論冒頭で触れた岩戸落葉神社と関わってくるのだが、その前に、さらにそれとは別の第二の「小野」について触れておきたい。その第二の「小野」とは、宇治郡（現山科区）の「小野」である。

三 夕霧卷の「小野」をめぐる第二の「小野」——宇治郡「小野」

夕霧卷の「小野」を宇治郡「小野」と捉える説があったことは、十五世紀後半に作られた『源氏物語』の注釈書『花鳥余情』から確認できる。ただ、『花鳥余情』から読み取れるのは、宇治郡「小野」説はあくまでも異説であり、正しいのは愛宕郡「小野」説であるという認識である。

現在の通説である愛宕郡「小野」説の源泉を辿っていくと、『花鳥余情』よりも百年ほど前に作られた『河海抄』にまで行き着く。

◆四辻善成『河海抄』「夕霧」（貞治元〔一三六二〕年頃）

りしの山こもりして山さといてしとちかひたるをふもとちかくてさうしおろし給ゆへなりけり

恵心僧都千日山籠間に安養尼所労ありけるに、さかり松までおりあひて対面の事あり。摸此事。小野は比叡坂本也。いまの大原也。
（『紫明抄・河海抄』角川書店 一九六八年 五一〇頁）

『河海抄』が指摘する「いまの大原」が、現代の地図上で確認できる大原（左京区）の地を指しているのか、あるいはそれよりもっと広い範囲を指しているのかについては見解が分かれている⁶⁾。この問題については、今のわたしには判断できないが、いずれにしても現代の注釈書に見られる「小野」の範囲内に収まっていることは動かない。

少なくとも愛宕郡「小野」説を前提に『源氏物語』夕霧巻本文を読んでいる現代のわたしたちにとって、『河海抄』の説はそれほど違和感があるものではないと言える。

そして、この『河海抄』の説に修正を加えているのが『花鳥余情』である。

◆一条兼良『花鳥余情』「夕霧」項（文明四「二四七二」年）

をのといふ所に山さともたまへるにわたり給へり

此物語の手習の巻に「かの夕霧の御やす所のおはせし山里よりは今すこしいりて山にかたかけたる家なれば」とあり。①山城国に小野里といふ所二あり。②宇治郡に小野里あり。③又愛宕郷に小野里あり。④この小野は愛宕の名所也。ひえの山よ川のみもと、たかのといふ所なり。

（源氏物語古注集成1『松永本花鳥余情』桜楓社 一九七八年 二六〇頁）

『花鳥余情』は、『河海抄』の大原説に対して④「たかの（高野）」説を提示する。『花鳥余情』が言及している「たかの」は、先に引用した日本古典文学全集の解説に「現在この地名は京都市左京区上高野、小野町にその遺称をとどめる」と記されていた場所を含めた、その周辺地域を指していると考えられる。先の『河海抄』説と同様に『花鳥余情』説に関しても、現在の注釈書の解説にある「小野」よりも範囲が狭いことがわかるが、ここで重要なのは、そこではない。①「山城国に小野里といふ所二あり」とある箇所なのである。『花鳥余情』が記すとおり、山城国に「小野」と称される土地は二つあった。一つは、これまで見てきた③愛宕郡の「小野」。もう一つが、前節の最後に触れた②宇治郡の「小野」なのである。

宇治郡の「小野」とは、愛宕郡の「小野」と同じく『和名類聚抄』にその名が記されている、由緒のある土地として知られた土地であった。

◆源順『和名類聚抄』巻第六「山城国第六十八」（承平「九三二〜八」年間）

宇治郡 宇治 大国 賀美 岡屋（乎加乃也） 余戸 小野（乎乃） 山科（也末之奈） 小栗（乎久留須）

（国立国会図書館デジタルコレクション『倭名類聚鈔二〇巻（元和版古活字本）』 3「32/64」コマ）

『角川日本地名大辞典』によると、宇治郡「小野」は「山科盆地の南端に位置する」ところで、現在も山科区に地名が残っている。京都市営地下鉄東西線の駅名として「小野」駅（山科区勧修寺東出町）があり、おおよそのイメージはつかみやすい。ちなみに、Google マップで小野の山荘の想定地である修学院（ここでは便宜的に叡山電鉄「修学院」駅、左京区山端壱町田町とする）から地下鉄東西線「小野」駅への距離を調べてみると十一キロと表示される。もちろんGoogle マップが示す道筋は平安時代におけるそれとは異なるものであるが、愛宕郡の「小野」と宇治郡の「小野」という二つの場所が、かなり離れたところにあることだけは理解されるだろう。

さて、ここで素朴な疑問が生じてくる。それは、そもそもなぜ『花鳥余情』は、愛宕郡の「小野」からは遠く隔たった、しかも夕霧巻本文から浮かび上がる「小野」の六つの特徴とも一致しない宇治郡の「小野」に言及しているのか、ということである。その答えは、④「この小野は愛宕の名所也」の箇所から読み取れる。押さえておきたいのは「この小野は」の意味である。これは、「さまざま文献や逸話で「小野」とある場合、宇治郡の「小野」を指している場合もある。しかし、この「小野」は愛宕郡の名所である」という意味であろうと考えられる。おそらく、『花鳥余情』が書かれた当時、①夕霧巻の「小野」の候補地としては愛宕郡「小野」説以外に、もう一つ宇治郡「小野」説が存在していた。しかも、その宇治郡「小野」説はかなり有力な説としてあった。だからこそ、『花鳥余情』は、②宇治郡「小野」について言及し、④改めてその説を否定する必要があったのである。

現代のわたしたちにとって宇治郡「小野」説は、妄説というべきもののように見える。しかし、『花鳥余情』が書かれた当時の人々にとっては、そうではなかった。例えば、そのことは「栗栖野」の想定地に関する注記からもうかがい知ることができる。

「栗栖野」は、先に夕霧巻本文から読み取れる地理的特徴として取り上げた「特徴5 栗栖野の荘園が近くにある所である」と関わる場所である。現代の注釈書では、「栗栖野」について次のように解説されるのが一般的である。

「栗栖野」は、山城国愛宕郡。現在、京都市北区の西賀茂、鷹峰、松ヶ崎、幡枝（はたえ）一帯。小野から近い。
（日本古典文学全集『源氏物語4』小学館 一九七四年 夕霧・三九二頁・頭注四）

この解説にある「栗栖野」は、夕霧巻を読んでわたしたちがイメージする「小野」と同じく愛宕郡の地名で、『和名類聚抄』「愛宕郡」にも「栗野（久留須乃）」と記されている。しかも、愛宕郡「小野」（現左京区）と「栗栖野」（現北区）の距離は約四キロほどである。この事実は、夕霧巻本文から浮かび上がる「特徴5 栗栖野の荘園が近くにある所である」とも合致する。

ただ、ここでもたしても問題がでてくる。それは、「栗栖野」もまた、愛宕郡だけに見られる地名ではなかったということである。『和名類聚抄』によると、宇治郡にも「栗栖野」と類似する地名があったことがわかる。引用は重複するが、再び当該箇所を引用する。

◆源順『和名類聚抄』巻第六「山城国第六十八」（承平「九三二〜八」年間）

宇治郡 宇治 大国 賀美 岡屋（乎加乃也） 余戸 小野（乎乃） 山科（也末之奈） 小栗（乎久留須）
（国立国会図書館デジタルコレクション『倭名類聚鈔二〇巻（元和版古活字本）』 3「32/64」コマ）

宇治郡に見られるのは「栗栖野」ではなく「小栗（乎久留須）」である。地名が完全に一致するわけではないが、「くす」という部分は共通している。なお、この地名は現在山科区栗栖野町として残っているが、近世においては、この土地が「小野」と強く結びついた場所として知られていたことが『都名所図会』から確認できる。

◆秋里籬島著・竹原信繁画『都名所図会』卷之五「前朱雀」(安永九「一七八〇」年)

栗栖くしらの小野は勸修寺より北、花山のほとりまでの野をいふ。

(『日本名所風俗図会8』角川書店 一九八一年 一五〇頁)

一見してわかるように、「栗栖」と「小野」は、一つの地名のもとに結びついている。このように「小野」と「栗栖」が近くに位置するのは、愛宕郡のみに見られるものではない。宇治郡においても見られるものであったことがわかるのである(7)。

この事実を踏まえて、再び『花鳥余情』に戻ろう。次の引用は、『花鳥余情』が「栗栖野」について解説をしている箇所である。かなり長い注記であるため、重要な部分のみを引用する。

◆一条兼良『花鳥余情』「夕霧」(文明四「一四七二」年)

くるすの、さうちか、らんみまくさなとりかはせて

……………①今案、山城愛宕郷之内小野郷は上賀茂領也。栗栖野郷は下社領也。寛仁二年十一月廿五日陣定ありて官符をなされおはりぬ。②此物かたりに「くるすの、御さうちか、らん」といふは此所也。③又宇治郡にも小野・栗栖野あり。それをいふにあらず。

(源氏物語古注集成1『松永本花鳥余情』桜楓社 一九七八年 二六〇頁)

『花鳥余情』の主張は明瞭である。まず、①愛宕郡の小野は上賀茂領で、栗栖野は下賀茂領であり、そのことは寛仁二「一〇一八」年の史料から確認できる。②よって、その史料と同時代に作られた『源氏物語』夕霧巻の「栗栖野」も、愛宕郡の栗栖野を指していると断定できる。③なお宇治郡にも小野・栗栖野があるが、その栗栖野を指しているわけではない、と述べているのである。改めて述べるまでもなく、『花鳥余情』にこうした注記が見られるのは、当

時、夕霧卷の「小野」を、さらには「栗栖野」までをも、宇治郡「小野」であり「栗栖野」とする説があったからである。しかも、その説は、妥当性のあるものとして広く知られるものでもあった。『花鳥余情』が二度までも宇治郡「小野」「栗栖野」説を取り上げ、否定しているのは、そのことを示している。

こうして『花鳥余情』によって完全に否定されたかのように見える宇治郡「小野」・「栗栖野」説であるが、実は、それ以降も完全に消えることはなかった。以後の注釈書を見ていくと、『花鳥余情』の愛宕郡「小野」「栗栖野」説の妥当性を認めつつも、それでもやはり宇治郡「小野」「栗栖野」説（特に「栗栖野」説）は無視できないものであったことが見てとれる。

◆三条西実隆『弄花抄』『夕霧』（文亀四「一五〇四」年）

くるす野のさう

〔花〕難文也。一義云賀茂人の文書に賀茂ちかくくるす野と云所ありと云々。大方は心得かたし。東のくるす野（＝宇治郡）にて有へからず。①一、説夕霧の在所の遠近をもしり、給はて小野といふに付けて御庄なればの給歟云々。②花に宇治郡の小野栗栖野ならて、賀茂領に小野くるす野ありと有。是は北の小野くるす（＝愛宕郡）也。然は不審なきにや。

（源氏物語古注集成 8 『弄花抄―付源氏物語聞書』 桜楓社 一九八三年 二〇八頁）

◆三条西実隆著『細流抄』『夕霧』（永正七「一五一〇」年～同一〇「一五二二」年）

くるす野のさう

③未決の事也。④くるす野は勸修寺の辺也。①一、説夕霧の在所の遠近をよくも分別せずして小野と云につきての給へりと云々。②されと花鳥にくはしくしるさる。是可然哉。

（源氏物語古注集成 7 『内閣文庫本細流抄』 桜楓社 一九八〇年 三二五頁）

『弄花抄』と『細流抄』は、ほぼ同じ内容のものである。いずれも②で『花鳥余情』に言及し、愛宕郡「小野」「栗栖野」説の妥当性を認めている。しかし、『細流抄』では、冒頭に③「未決の事也」と記し、さらに④「くるす野は勸修寺の辺也」と解説している点は見逃してはならない。ここに記されている「勸修寺」とは、現在山科区勸修寺御所ノ内町にある寺で、それはまさに宇治郡「栗栖野」内にあるものであった。そして、その説をもとに生まれたのが①「二、説夕霧の在所の遠近を、」の解釈である。これは、愛宕郡「小野」——宇治郡「栗栖野」という位置関係のもとのみ成立する解釈なのである。

さらに、この後『万水一露』にまで至ると、今度は「愛宕郡「小野」——宇治郡「栗栖野」説を支持する人たちの中から、作者紫式部の無知を疑うような解釈までもが現れてくる。

◆能登永閑『万水一露』「夕霧」(天正三「一五七五」年)

さうとは、夕霧の知行也。①くるすのちかき所に有と見えたり。其庄の人にまくさとかりてかはせよと也。②但くるす野と云は小野よりは四五里もへた、りたる所也。如何。③もし紫式部無案内にてかけるにやと云り。又

一説に加茂人の文書に加茂ちかく、るすの小野と云所有云々。……(以下『花鳥余情』『弄花抄』『河海抄』の引用)

(源氏物語古注集成27『萬水一露4』桜楓社 一九九一年 五一頁)

『万水一露』が取り上げている説は、次のようになる。①物語内では「小野」と「栗栖野」は「ちかき所」として書かれているが、②「栗栖野」という土地は、愛宕郡「小野」(現左京区)から「四五里」も離れている。これは、どういう理由からだろうか。③もしかすると、作者紫式部が土地のことを知らずに書いているのではないか。これが『万水一露』に見える説である。

『万水一露』に見える注釈の意識は、もはや「小野」や「栗栖野」がどの場所を指しているのかという問題へは向けられていない。そこにあるのは、夕霧巻の「小野」は愛宕郡にあり、「栗栖野」は小野郡にあることを論の前提と

した上で、それら二つの土地が近くにないことの意味をどのように解釈するかという問題意識だったのである。

愛宕郡「小野」「栗栖野」説と宇治郡「小野」「栗栖野」説が併記される状態は、北村季吟『湖月抄』（延宝元「一六七三」年）へと引き継がれた後、近代に入り『源氏物語』注釈書が『湖月抄』を底本とすることを止めたところまで続くことになる。

以上、かなり遠回りしながらではあるが、現在の諸注釈書に共通して見られる「夕霧卷の「小野」＝愛宕郡「小野」説が通説となるまでの過程を追ってきた。そして、いよいよここからが本題である。

本論冒頭で触れたように、現在、京都市北区小野岩戸には、『源氏物語』の登場人物である落葉宮ゆかりの神社があるという。しかもそれは神社名に「落葉」の名を冠しながら、落葉宮の妹である女三宮の霊を祀っているとの伝承もある、いかにもいかがわしい古跡であった。

ただ、この社が「落葉（宮）」の名を有しているのには、それなりの理由がある。興味深いのは、この社が、ある時期から愛宕郡「小野」・宇治郡「小野」と並ぶ、もう一つの「小野」として知られるようになった土地に祀られているということ。そして、その社が『源氏物語』の登場人物である落葉宮と結びついたのは、夕霧卷の「小野」に関して、それが愛宕郡「小野」であるか、宇治郡「小野」であるのか、それら二つの説の間で解釈が揺れていた、まさにそのころであったということなのである。

四 岩戸落葉神社と第三の「小野」——葛野郡「小野」

江戸時代に作られた地誌を見ると、山城国には、これまで見てきた二つの「小野」に加えて、もう一つ「小野」があることがわかる。それが、『源氏物語』ゆかりの岩戸落葉神社がある葛野郡の「小野」である。次に示すのは、従来、愛宕郡「小野」の範囲に関する根拠史料として用いられてきた『扶桑京華志』『山城名跡巡行志』の記述の、その後にくるものである。

◆松野元敬『扶桑京華志』卷之一「原野並森林附街衢」(寛文五「二六六五」年)

小野 ……。凡山城號スルニ小野ト者ノ三也。一曰①栗栖ノ小野在ニ山科ニ。一曰②大原ノ小野乃シ是也。一在ニ洛北可ニ十余里、与ニ丹波ニ相接之地。一曰③葛野小野也。(『新修京都叢書22』臨川書店 一九七二年 六一頁)

◆浄慧『山城名跡巡行志』第三「愛宕郡三」(宝曆四「一七五四」年)

小野 ……。当国ニ小野三所アリ。一ハ①宇治郡山科ノ小野(自ニ小野村ニ至ニ朱雀安禪寺ニ皆小野庄也)。一ハ③葛野郡北山ノ小野(真弓・杉坂等ノ六村ニ愛宕郡雲畑ヲ加テ小野七村トイフ)。一ハ②愛宕郡。④即チ此三所共ニ在ニ和歌ニ。(『新修京都叢書22』臨川書店 一九七二年 三二八頁)

『扶桑京華志』『山城名跡巡行志』には、山城国には三つの「小野」があるとして、①宇治郡「小野」(現山科区)、②愛宕郡「小野」(現左京区)、③葛野郡「小野」(現北区)を挙げている。これらの解説を読み、まず気づくのは①宇治郡「小野」の存在の大きさである。両書のどちらにおいても、最初に名前が挙げられているのは、①宇治郡「小野」(現山科区)である。つまり、当時の人々にとって「小野」という地名から想起されるのは、②愛宕郡「小野」ではなく、①宇治郡「小野」であったということである。前節で「夕霧巻の「小野」=宇治郡「小野」という誤った説が『花鳥余情』の時点において存在し、それは近代に至るまで消えることがなかったと述べたが、その背景には、おそらくこうした状況も関係していたのではないかと思われる。

『扶桑京華志』『山城名跡巡行志』を読んでもう一つ気づくのは、③葛野郡「小野」の存在である。葛野郡「小野」とは、「清滝川の上流域、水谷川との合流点付近に位置」し「四方を山林に華もまれた山城国北部の山岳地帯」を指す⁽⁸⁾。現在は北区に属しており、「小野郷地区」で検索をかけると、おおよその位置が確認できる。ちなみに愛宕郡「小野」(現左京区)と「岩戸落葉神社」の距離をGoogleマップで調べてみると、約十九キロある。つまり、葛野郡「小野」は、先の宇治郡「小野」(現山科区)と愛宕郡「小野」の間の距離よりもさらに遠く離れたところにある。

そんな葛野郡「小野」であるが、『山城名跡巡行志』④によると、この「小野」もまた、宇治郡と愛宕郡の「小野」と同じく和歌に詠み込まれる、文学の世界とも縁が深い有名な土地として知られていたことがわかる。つまり、葛野郡「小野」は古くから和歌にも詠まれる場所としてあり、またそうした「小野」だからこそ『源氏物語』ゆかりの土地として考える人もいた。愛宕郡「小野」だけでなく、宇治郡「小野」をも夕霧卷の「小野」だと考えた人たちがいたことを思えば、葛野郡「小野」を夕霧卷の「小野」と関連性のある場所だと考えた人がいたとしても不思議なことではない。

ただ、葛野郡「小野」には、他の二つの「小野」とは決定的に違うところがある。それは、葛野郡「小野」は、『源氏物語』以後に現れた地名であって、『源氏物語』が書かれた時点には存在しない地名であった点である。先に述べたように、宇治郡・愛宕郡の「小野」に関しては、『和名類聚抄』にその名が記されていた。しかし、葛野郡「小野」に関しては『和名類聚抄』に、その地名は記されていない。実際に『角川日本地名大辞典』「小野（北区）」項を参照しても、「〔中世〕小野荘 平安末期〜戦国期に見える荘園名。山城国葛野郡のうち」とあるのみで、それ以前のことについては何も記されていない。これらのことから、葛野郡の「小野」は、確実に『源氏物語』以後に生まれた地名であったことがわかるのである⁹。——『和名類聚抄』の時代はおろか『源氏物語』の時代においてさえも、いまだ存在していなかった葛野郡の「小野」に、『源氏物語』夕霧卷のゆかりの「小野」があった。——岩戸落葉神社は、こうした奇妙な論理のもとに成り立つものとしてある。

それでは、改めて岩戸落葉神社について確認しておこう。『京都・山城寺院神社大事典』によると、岩戸落葉神社は、「岩戸社」と「落葉社」という二つの神社に由来とするものである。もともと「岩戸社」は小野上村（現北区）にあったのだが、近世に「落葉社」のある小野下村（現同上）に移設され、合祀された。なお、「落葉社」の神社名は、かつては「墮川（おちがわ）神社」であったが、ある時期に「落葉（神社）」へと改められたものだという。さらに、同解説は、当神社の伝承について述べている。

①「山州名跡志」は「源氏物語」の柏木が恋慕したという、落葉宮の妹、女三の宮の靈を祀ると記す。②だが「扶桑京華志」が「按源氏物語」有_下落葉宮_{ト云}女者、幽_三居_{スルガ}小野_二之事_上、後世好事_者窃_ニ擬_ス於_ニ神社_ニ乎」と記すように、「源氏物語」の登場人物の名に付会された後世の伝承で、落葉社への改名もその前後と推測される。
〔岩戸落葉神社〕『京都・山城寺院神社大事典』平凡社 一九九七年 九八頁

本論文に関わってくるのは、①『山州名跡志』と②『扶桑京華志』の記事である。①は、かつて落葉社には女三宮の靈を祭神とする伝承があったこと。②は「墮川（神社）」から「落葉（神社）」への改名が、①の伝承と関わるものであったことを述べている。

この解説にある落葉社と『源氏物語』の関わりは、一見してかなりいかがわしいものであることがわかる。ただ、この解説に見られるいかがわしさには、若干の修正が必要であると考ええる。ポイントは①と②の記述内容のズレにある。①『山州名跡志』には落葉社の祭神が女三宮であるという伝承があったことが記されている。②には「扶桑京華志」には、落葉社への改名は、登場人物の名に付会されたものであったと記されている。ここで疑問に感じられるのは、もし「落葉社への改名が登場人物の名に付会されたものであるならば、当然のことながら、その神社名は「女三宮（神社）」となるはずではないか、ということなのである。

おそらく、①「柏木が恋慕したという、落葉宮の妹、女三の宮の靈を祀る」の部分は、後に追加されたものであり、本来はなかったものであると考えられる。いずれにしても誤った説ではあるが、まずはいかがわしさ自体の修正をしていくことにしよう。

それでは、本論冒頭で取り上げた加納論文、ならびに右の『京都・山城寺院神社大事典』に引用されている『山州名跡志』の記述を追いつつ、落葉社に関する基本的な事実確認からはじめていこう。まずは、所在地からである。『山州名跡志』には、落葉社について、次のような解説が付けられている。

◆白慧『山州名跡志』巻之六「葛野郡」(元禄十五「一七〇二」年序、正徳元「一七一二」年刊)

落葉宮 ①在_リ下村民居ノ良一町許_ニ。鳥居(南向、木柱)。拜殿(同)。社(同)。所_レ祭_ル社記未_レ考。②土人伝(云)柏木衛門方意ヲ寄シ女三宮ノ靈ト。③按_{スル}ニ是_レ虚説ナラン。彼_ノ源氏物語ハ寓言ナルヲ不_レ知_ラヤ哉。土人為_ス産沙ノ神ト。例祭九月十五日。有_リ神輿一基。

(『新修京都叢書15』臨川書店 一九六九年 一九八頁)

簡単に内容を見ていくと、①この社は「下村民居、良一町許_ニ」にあるもので、祭神などのことについては未詳である。②地元の人の言い伝えでは、『源氏物語』の登場人物である柏木が思いを寄せた女三宮を祀っているとのこと。③そこで白慧は、この地元の言い伝えは「虚説」であること。彼らは『源氏物語』がフィクションであることを知らないのかといった辛辣なコメントを付けている。ちなみに、この①②の解説は、浄慧『山城名跡巡行志』、秋里籬島著・竹原信繁画『拾遺都名所図会』(天明七「一七八七」年)に、ほぼそのままの形で継承されている。

『山州名跡志』①「在_リ下村民居、良一町許_ニ」にある「下村」とは、葛野郡「小野」に見られる村名である。

◆白慧『山州名跡志』巻之六「葛野郡」(元禄十五「一七〇二」年序、正徳元「一七一二」年刊)

小野(所ノ名) 在_リ岩屋_ニ北二十余町_ニ。上小野・下小野。又云_フ上村・下村_{トモ}。総ジテ自_レ此西北ニ双デ、東河内・西河内・上村・下村・真弓・細河・杉坂等ノ村アリ。共ニ小野ノ庄内也。

(『新修京都叢書15』臨川書店 一九六九年 一九四頁)

つまり、落葉社とは、葛野郡「小野」にある下村という村から北東へ「一町許」移動したところにあつたこととなる。そして、現在もその場所には岩戸落葉神社という社が残っている。

次に「女三宮の靈を祀る」という伝承に関するものである。これは『山州名跡志』②「土人伝(云)柏木衛門方意ヲ寄

シ女三宮ノ靈ト」を踏まえてのものである。『山州名跡志』を見る限り、神社名「落葉宮」は、柏木が想いを寄せた女性であり、その女性の名は女三宮であった、というふうにしから読み取れないが、本論冒頭でも述べたように、これは明らかな間違いである。落葉宮は女二宮とも称される女性で、女三宮は彼女の妹にあたる。確かに、落葉宮は柏木の正妻であるため、「意ヲ寄シ」女性であったとも言えなくもないが、ここはやはり柏木が女三宮に対して秘かに想いを寄せ、密通を犯し、最後は心を痛め死去してしまったことを指しているはずである。このように②の記述には、明らかな事実誤認があり、だからこそ、白慧は③この地元の人と言いは「虚説」であること。さらに『源氏物語』という虚構の世界の人物を、現実世界に存在する神社の祭神と考える彼らの無理解をあざ笑っているのである。しかし、他の文献を見ていくと、『山州名跡志』に見える②「落葉宮」女三宮」という奇妙な伝承は、本来のものではなかったらしいことがわかってくる。その文献というのが、先の『京都・山城寺院神社大事典』にも引用されていた『扶桑京華志』である。『扶桑京華志』は、『山州名跡志』よりも四十年ほど前に作られたものであるが、これまでの情報を一旦頭から切り離して、まずは『扶桑京華志』の記述だけを見ていこう。そうすると、『扶桑京華志』の時点では、落葉社にゆかりのある落葉宮は、やはり落葉宮その人として認識されていたように読み取れる。

◆松野元敬『扶桑京華志』巻之一「神社」(寛文五「二六六五」年)

落葉ノ神社 在二下小野郷一。號シテ曰三落葉大明神ト。①伝言嵯峨ノ帝ノ皇后也。帝ニ有ニ藤后旅子一、有ニ橘后嘉智子。蓋以ルニ橘后ハ祀ルニ梅宮ニ。疑ハ是レ藤后ノ廟カ乎。藤后ハ者贈相国藤ノ百河ノ之女也。②又按スルニ源氏物語ヲ一有ニ落葉宮ト云ニ、女者幽ニ居スルノ小野ニ一之事。③後世好事ノ者窃ニ擬スルカニ、二名ヲ於神社一乎。

(『新修京都叢書22』臨川書店 一九七二年 一三頁)

ここで『扶桑京華志』は、当該神社の所在地を記した後、①祭神は藤原旅子であるという伝承を紹介している。その後、②『源氏物語』に落葉宮という「小野」に「幽居」した女性がいることを述べ、③現在の「落葉神社」という神

社名は、「後世好事者」が『源氏物語』の落葉宮に寄せて、別の名前から「落葉神社」へ改名したのではないかと推測している。つまり、②③の記述からわかるのは、以下の二点である。一つは、『扶桑京華志』が書かれた当時、落葉社の由来に関して、その地域では『源氏物語』の落葉宮と関連性のある伝承があったということ。もう一つは、その伝承に出てくる『源氏物語』の落葉宮は、やはり落葉宮その人として認識されていたということ。少なくとも『扶桑京華志』に落葉宮と女三宮を同一視する記述は存在しない。このことから、「女三宮の霊を祀る」という伝承は、『扶桑京華志』以後に付加された、新たないかがわしさであったことがわかってくるのである。もちろん、だからといって落葉社を『源氏物語』の落葉宮に結びつける伝承が、いかがわしいものであることに変わりはない。従来指摘されてきたいかがわしさを、本来のいかがわしさに戻したまでのことである。

以上、葛野郡「小野」（現北区）にある『源氏物語』ゆかりの場所として知られる岩戸落葉神社の概略と伝承を確認してきた。ただ、岩戸落葉神社の成り立ち、そして当神社と『源氏物語』の落葉宮をつなぐ論理を明らかにしたところで、それが誤った説であることに違いはない。『源氏物語』が成立した時点においては、まだ葛野郡に「小野」という地名は存在しなかった。それ以前に『源氏物語』夕霧巻本文には、落葉宮が移り住んだ「小野」は、比叡山の麓（特徴1）として描かれていたはずであった。しかし、岩戸落葉神社がある「小野」は、そこからはるか遠く離れた葛野郡「小野」（現北区）なのである。つまり、岩戸落葉神社とは、地名の有無という歴史的観点から見ても、夕霧巻本文の観点から見ても明らかに条件が合わない「小野」に作り出された古跡であった。少なくとも、『源氏物語』夕霧巻を正確に読んだことがある人であれば、容易にそれが間違いであることに気づくはずなのである。

ただ、それゆえに、ここで新たに素朴な疑問が浮かんでくる。それは、『源氏物語』夕霧巻本文を読む限り、落葉宮ゆかりの地としてふさわしいのは、比叡山の麓にある愛宕郡「小野」（現左京区）であった。そうした状況の中で、なぜ比叡山の麓からは遠い土地である葛野郡「小野」に落葉宮ゆかりの古跡が作り出されたのかということである。

おそらく、岩戸落葉神社は、『源氏物語』だけを根拠にして生まれたものではない。『源氏物語』を含めたもつと広

い古典文学作品全体に関する本文と解釈が複雑に絡み合いながら生み出されたものであった。わたしがそのように考えるのは、これまで述べてきた落葉宮社とほぼ同じ現象が『伊勢物語』ゆかりの古跡からも確認できるからである。『伊勢物語』八十三段には、「小野」に隠棲する惟喬親王の様子が描かれている。

◆『伊勢物語』八十三段

かくしつづもうで仕うまつりけるを、思ひのほかに、(惟喬親王は)御髪おろし給うてけり。正月に拝み奉らんとて(翁が)小野にもうでたるに、比叡の山ひゑのやまのふもとなれば、雪いとたかし。

(新潮日本古典集成『伊勢物語』新潮社 一九七六年 一〇〇頁)

惟喬親王が隠棲した「小野」は、「比叡の山ひゑのやまのふもと」にある土地であった。現代の注釈書では、この記述を踏まえ「小野」を「京都市の北部、八瀬やせの近く。」(『新潮日本古典集成』一〇〇頁、頭注二)と解説する。改めて述べるまでもなく、この解説にある「小野」は、愛宕郡「小野」(現左京区)を指している。ちなみに、現在、左京区大原上野町には「惟喬親王の墓」なるものが残っている。それが本当に惟喬親王の墓であるか真偽のほどは不明であるが、こうした古跡があることから、「惟喬親王―愛宕郡「小野」という認識が古くから広く一般に知られていたことがわかるだろう⁽¹⁰⁾。

ただ、惟喬親王が隠棲した場所として認識されていた土地は、必ずしも愛宕郡「小野」だけではなかった。第三の「小野」である葛野郡「小野」もまた、かつては惟喬親王が隠棲した場所と考えられていたのである。

◆白慧『山州名跡志』卷之六「葛野郡」(元禄十五「一七〇二」年序、正徳元「一七一二」年刊)

小野(所ノ名) 在リ^ニ岩屋、北二十余町^ニ。……按スルニ^ニ①惟喬親王小野ニ籠居ノ事、伊勢物語ニ載ス。其ノ所ハ比叡坂本ノ小野ト云々。②此ノ所ニモ其ノ事アリ。③如シ^レ左。

○棧敷獄⁽¹¹⁾……。●御厩⁽¹²⁾……。○惟喬ノ社⁽¹³⁾……。○惟喬ノ塔⁽¹⁴⁾……。

〔新修京都叢書15〕臨川書店 一九六九年 一九四頁

『山州名跡志』は、①惟喬親王が「小野」に隱棲したことは『伊勢物語』に書かれている。その『伊勢物語』によると、その「小野」は「比叡坂本ノ小野」であったと記されている。②ただし、惟喬親王が隱棲したという伝承は「此ノ所ニモ」あると述べた後、③葛野郡「小野」にある惟喬親王ゆかりの古跡を紹介しているのである。『山州名跡志』が紹介する、これらの惟喬親王ゆかりの古跡は、『伊勢物語』本文から見ても、歴史的な観点から見ても、明らかにニセモノである。なぜなら、葛野郡「小野」は「比叡坂本」からは遠く離れた土地であり、それ以前に惟喬親王が生きていた時代には、まだ葛野郡に「小野」は存在していなかったからである。

葛野郡「小野」には、二つの物語のゆかりとしての顔があった。一つは、『源氏物語』落葉宮にゆかりのある土地としての「小野」である。もう一つは『伊勢物語』惟喬親王にゆかりのある土地としての「小野」である。一見、これら二つの顔は無関係なもののように思われる。しかし、これら二つの顔は、次の一点において強く結びついている。それは、『伊勢物語』に描かれる惟喬親王の隱棲地の「小野」と『源氏物語』の落葉宮が移り住んだ「小野」が同じ「小野」であったということである。

◆四辻善成『河海抄』『夕霧』（貞治元〔一三六二〕年頃）

をのといふ所に山さともたまへるに

伊勢物語惟喬のみこかしらおろしてをのにすみ給。第三うつほの千景の大臣た、こうをうしなひてのち山里の心ほそけなるとのまうけ給てこのわたりはひえあはれにきこゆる所なり。

〔紫明抄・河海抄〕角川書店 一九六八年 五一〇頁

『源氏物語』の落葉宮はどの「小野」に移り住んだか（中川）

『河海抄』は、夕霧卷の「小野」の解説として『伊勢物語』に言及し、その地で惟喬親王が出家し住んでいたことについて述べている。この指摘は、単に「小野」という地名が一致していることだけを言おうとしているのではない。

『伊勢物語』八十三段の「小野にもうでたるに、比叡の山のふもとなれば」という地理的特徴が、『源氏物語』夕霧卷に描かれる「小野」の特徴（特徴1・6）と一致していることを踏まえてのものであるはずである。その上で、『河海抄』は、落葉宮が移り住んだ「小野」は、惟喬親王が隠棲した「小野」と同じだと述べているのである。

もちろん、ここで『河海抄』が意識しているのは、愛宕郡「小野」（現左京区）である。そのことは、先に引用した箇所「小野は比叡坂本也。いまの大原也」とあったことから間違いない。ただ、ここで押さえておきたいのは、「小野」がどこにあったのか、ではない。『伊勢物語』の惟喬親王が隠棲した「小野」に、『源氏物語』の落葉宮が移り住んだ、という論理構造なのである。

何度も繰り返すように、本文から見ても、歴史的な観点から見ても、『伊勢物語』惟喬親王が隠棲した「小野」、そして『源氏物語』の落葉宮が移り住んだ「小野」は、愛宕郡「小野」だと考える方が妥当である。ただ、かつては「小野」という地名だけを耳にした時、愛宕郡「小野」（現左京区）ではなく、宇治郡「小野」（現山科区）や葛野郡「小野」（現北区）を思い浮かべる人たちが確実に存在していた。それだけではない。時には土地名が同じであることから、ついつい間違ってしまふこともあったようである。

①西坂本は小野村にある。②京都市北区小野の辺で、③左京区の大原の三千院の東南方である。

（日本古典文学大系『源氏物語5』岩波書店 一九六三年 四八七頁、補注五三〇）

これは、夕霧卷本文「比叡坂本に、小野といふ所にぞ」の箇所につけられた解説である。①③は愛宕郡「小野」のことを述べるものであるが、なぜか②だけは葛野郡「小野」の情報が記されていることがわかるであろう。

このように原因はさまざま考えられるが、いずれにしてもこういう経緯で葛野郡「小野」に惟喬親王ゆかりの古跡

と岩戸落葉神社という二つの古跡が生み出された。誤解すべきでないのは、葛野郡「小野」という土地にこれらの古跡が作り出されたのは、必ずしも知識レベルが低かったからではないということである⁽⁵⁾。現代の代表的な『源氏物語』注釈書の一つである日本古典文学大系でさえも愛宕郡「小野」と葛野郡「小野」を混同してしまうことがあった。一見して明らかにあやしい古跡であっても、それをそのまま享受者の学問の知識レベルの問題と結びつけることのは、あまりにも短絡的すぎる。こうした種類の間違いは、今も昔も学問の知識レベルに関係なく起こりうるものだからである。

五 ま と め

現代のわたしたちにとつて、惟喬親王ゆかりの土地は、愛宕郡「小野」である。しかし、各時代・各地域の違いによつて、「小野」という地名から思い浮かべる「小野」の内実は違つていた。その中には葛野郡「小野」を思い浮かべた人たちも確実に存在したのである。そして、葛野郡「小野」が惟喬親王の隠棲地としての「小野」と結びついた瞬間、彼らにとつては、その土地はあたかも惟喬親王が生きていた時代から存在していたかのように感じられるようになった。こうした意識は、距離の問題をも解消させている。本来、葛野郡「小野」は、『伊勢物語』で惟喬親王が隠棲したとされている「比叡坂本ノ小野」から遠く離れた土地としてあつた。しかし、その土地が惟喬親王の隠棲地となつた瞬間に、葛野郡「小野」もまた「比叡坂本」にふさわしい「小野」であるかのように感じられるようになったのである。

岩戸落葉神社が『源氏物語』の落葉宮ゆかりの場所となつたのは、おそらくそれと同じ時期のことであつたのではないか。彼らにとつて、葛野郡「小野」が惟喬親王が隠棲した「小野」であるならば、必然的に落葉宮が移り住んだ「小野」も、葛野郡「小野」であるはずだからである。

何度も繰り返すように、本来、岩戸落葉神社は、『源氏物語』と一切関係のない、ゆかりのない建物であつた。し

かし、その建物を『源氏物語』ゆかりとして信じていた人たちは、そのように考えなかった。それだけではない。彼らは、『源氏物語』の落葉宮という人物名、そして彼女が「小野」に移り住むという物語展開は、葛野郡「小野」にある岩戸落葉神社から着想を得たものだというふうに考えはじめるのである。

御祭神として、天御衣織女稚姫神、弥都波能売神、瀬織津比咩神の三神を祀る。落葉姫命を御祭神とする御霊社（本殿石）を撰社とする。当神社の創建年代は不詳乍ら平安時代前期には已に祀られており、岩戸社は元の天津石門別稚姫神社、落葉社は元の墮川神社で共に延喜式内社であったが、元和年間に岩戸社が火災に遭い、落葉社に合祀され岩戸落葉神社となった。この地、小野郷は清滝川の上流に位置し、平安京遷都に当たっては主要な調木地の一つに選ばれ、寛仁の御世には賀茂別雷神社の神領となり、次いで天領（天皇家の御領）となった。因に、源氏物語のモデルとなった落葉姫の名はこの里を閑居の地とされた事に依る。

（京都市観光協会・京都観光オフィシャルサイト『京都観光ZaVi』「岩戸落葉神社」）

これは、岩戸落葉神社に立てられている駒札の解説文である。興味深いのは、最後の一文である。いささかわかりにくい文章であるが、その内容は次のようにまとめることができるだろう。——『源氏物語』の落葉宮という名前は、その人物が作中で岩戸落葉神社があるこの里を閑居の地とされたことに由来する。——この駒札がどのような史料を典拠としているのかについては、残念ながら今のところ見出せていない。よって、この駒札の解説に見られる「モデル（準拠）」「～された事に依る」という意識が、いつから見られるようになったのかについては不明であるが、おそらくこうした論理のもとに、それまで「墮川（神社）」であった神社名が「落葉（神社）」へと改名された。改名の理由は明白である。そもそも『源氏物語』の登場人物の落葉宮という名は、作者紫式部が「小野」の地にある「落葉社」という神社名から着想を得たものだった。だからこそ、神社名も「墮川（神社）」ではなく、紫式部が着想を得たという本来の「落葉（神社）」に戻さなければならなかったのである。

以上の考察を振り返ってみると、岩戸落葉神社と『源氏物語』の落葉宮の関係が、論文冒頭で紹介した時よりも安直なものではないことがわかってくるはずである。両者の関係は、単に名前が同じだからという理由だけで結びつけられたものではなかった。また、『源氏物語』の初歩的な誤読から結びつけられたものでもなかった。両者を結びつけたのは、『源氏物語』の知識だけではない、『伊勢物語』ならびに『源氏物語』古注釈の世界を含めた総合的な知識に根ざした、ある意味「正しい理解」であったのである¹⁶。唯一、彼らが知らなかったのは、『源氏物語』が書かれた当時、落葉宮が移り住んだ「小野」に、「小野」が存在しなかったということ。それだけであった。

岩戸落葉神社は、『源氏物語』が書かれた当時から、『源氏物語』ゆかりとしてあったわけではない。後世の人たちに『源氏物語』ゆかりの古跡として認識された瞬間に、それにふさわしいものへと作り替えられた古跡だったのである。

注

(1) 夕顔の墓は、現在も京都市下京区夕顔町にある。『源氏物語を歩く』「夕顔」〔文学歴史4〕JTBパブリッシング 二〇〇八年 二二頁)の解説には「江戸時代に夕顔を悼んだ人が宝篋印塔(ほうきょういんとう)を造り、以来守り続けてきている」とある。夕顔の墓は、秋里離島『都名所図会』(安永九「一七八〇」年)をはじめとする数多くの地誌でも言及される有名な古跡である。『源氏物語を歩く』には「今は個人宅の中庭なので、自由に拝観することはできない」とあるが、臈谷寿「源氏ゆかりの地を訪ねて―平安京の住み分け」〔源氏物語の鑑賞と基礎知識8夕顔〕至文堂 二〇〇〇年 一二頁)に夕顔の墓のカラー画像が掲載されている。ちなみに『都名所図会』〔日本名所風俗図会8〕角川書店 一九八一年 四〇頁)にも夕顔の墓が描かれているが、若干形が違うような気もする。

(2) 京都市宇治市にある古跡である。橋姫・椎本・総角・早蕨・東屋・宿木・浮舟・蜻蛉・手習・夢浮橋の十卷すべてに、個別のゆかりの場所が設置されている。『平安時代の宇治』(宇治文庫2 宇治市教育委員会 一九九〇年 七四頁)によると、宇治十帖の古跡に言及した早い例としては『平等院旧記』(寛永十七「一六四〇」年)であるとのこと。ちなみに、古跡の一部は、道路整備などの理由で現在の場所に移設されたものである。

宇治十帖の古跡の歴史については、前掲『平安時代の宇治』のほか、次の論考に詳しく考察されている。

- ・安藤徹『源氏物語』のまち・宇治―史跡と観光文化―(叢書〈知〉の森5『源氏文化の時空』森話社 二〇〇五年)
 - ・須藤圭『源氏物語―光源氏の「涙の滝」と義経の「涙の滝」―(『ものがたりたちの京都―京都文学入門』武蔵野書院 二〇一九年)
 - (3) 『角川地名大辞典』の「小野郷〈左京区〉」(「古代」の項でも、小野(郷)の範囲を示す根拠史料としては、やはり『山城名跡巡行志』の記述が引用されている。このことから、現地点では、それ以上は遡ることはできないと考えられる。
 - (4) 福嶋昭治『源氏物語の二つの小野』(『講座平安文学論究13』風間書房 一九九八年)
 - (5) 夕霧巻の「小野」に関する重要な論考は、
 - ・角田文衛・加納重文編『源氏物語の地理』(思文閣出版 一九九九年)
 - にまとめられている。なお、近年のものとしては、
 - ・加納重文『源氏ゆかりの地を訪ねて―落葉の宮の小野山荘(坂本)』(『源氏物語の鑑賞と基礎知識23夕霧』至文堂 二〇〇二年)
 - ・増田繁夫『落葉宮の小野の山荘』(同右)
 - ・横溝博他『源氏ゆかりの地を訪ねて―横川と小野の里』(『源氏物語の鑑賞と基礎知識40手習』至文堂 二〇〇五年)
 - ・一文宇昭子『源氏ゆかりの地を訪ねて―小野の山里再考・尼君庵の変奏』(『源氏物語の鑑賞と基礎知識43夢浮橋』至文堂 二〇〇五年)
- がある。現地の写真を交えつつ、従来の説が簡潔にまとめられている。新たな知見も加えられており、とても参考になる。
- (6) 例えば、玉上琢彌は、『河海抄』の述べるところの「大原」について、次のように述べている。
- 『河海抄』は、「小野は比叡坂本也いまの大原也」と注したため、小野は大原と考える説もある。大原も小野郷の中ではあるが、当時の人々の間では、小野郷のすべてが小野とよばれたのではない。小野と呼ばれる地域と、大原と呼ばれる地域はちがう。……『河海抄』の注は必ずしも誤りではなくて、室町時代には大原というと八瀬の南あたりから今の大原までの地域をさしていたのである。それを現代の研究者がよみちがえたのだ。
- (7) 高等学校で使用される国語便覧では、「小野」「栗栖野」に関して、宇治郡のものしか表記していないものもある(『京都付』(『小野の山荘』『源氏物語評釈8』角川書店 一九六七年 二八七頁)

近図「新訂国語図説(四訂版)」京都書房 二〇一七年 二三頁。

(8) 「小野(北区)」項『角川地名大辞典』角川書店 三三〇頁)

(9) ちなみに『日本歴史地名大系』(平凡社 引用はジャパンナレッジによる)「北区・小野郷」によると、葛野郡「小野」に「小野」の名が現れるのは、平安末期のこと。地名が確認できる最も古い史料は、久安五「二一四九」年十一月十五日の藏人所下文案(壬生家文書)であるが、当該文書に記される地名は「小野」ではなく「小野山」であったと解説されている。また、同書には「古代・中世には大原・八瀬辺りをさす小野郷(現左京区)と区別するため、小野山の名でよぶことが多かった」とも記されている。つまり、愛宕郡「小野」と葛野郡「小野」という二つの「小野」は、そもそもが混同されやすい土地であったことがわかる。

(10) 惟喬親王の墓は、秋里籬島著・竹原信繁画『拾遺郡名所図会』にも「惟喬親王旧跡」として紹介されている。

惟喬親王旧跡 上野村南の方、田の字に御所内といふあり。伝へ云ふ、惟喬親王閑居の所なりとぞ。まだ同所ひがしの山際に一本杉といふ所あり。その地に古き石塔あり。土人云ふ、惟喬親王の御墓なりと云ひ伝ふ。

『日本名所風俗図会』角川書店 一九八一年 三〇六頁)

なお、玉上琢彌は、この墓について「明治政府やそれを支えた平田流の国学者がきめたものであって、あまり確実なものではなく、「大原上野の惟喬親王の墓は、公認されたという点を除くとなら特別の根拠はない」と指摘している(前掲注(6)書 二八七〜八頁)

(11) 棧敷嶽は「岩屋山志明院の北方に聳えたつ高山。海拔八百九十六メートル。比叡山より四十八メートル高い。山城・丹波両国堺に当たる」(『日本名所風俗図会』8 角川書店 四九九頁)。「山州名跡志」では、棧敷嶽にまつわる惟喬親王の伝承とともに、山頂にある池・三本竹についても触れられているが、どちらも所在地は不明。ちなみに、引用本文中にある「○」「●」の記号について、「山州名跡志」凡例」に記されているところによると、「○」は同書執筆時に現存している、「●」は確認できなくなっていることを表わしている。

(12) 『山州名跡志』には棧敷嶽にあったと記されるが所在地は不明。惟喬親王の馬を飼っていた場所だという。

(13) 『山州名跡志』には東河内村の南にあったと記されているが、現在はない。解説には「今は北区大森東町の安楽寺(真言宗、無住)に遷され、惟喬親王像を安置する」とある(『日本名所風俗図会』8 角川書店 一九八一年 五〇〇頁)。

(14) 『山州名跡志』には、惟喬社と同じく東河内村の長福寺にあったと記されており。現在も確認できる。解説によると、塔

は、「北区大森東町長福寺（臨濟宗大徳寺派）にある。高さ一・六メートルあまりの宝篋印塔（室町）。供養塔としてつくられたものであろう」とのこと（『日本名所風俗図会』8 角川書店 一九八一年 五〇〇頁）。

(15) 『源氏物語』夕霧巻の「小野」と葛野郡「小野」のつながりとして、一つ気になることがある。前掲注(9)で、かつて葛野郡「小野」は愛宕郡「小野」と区別するために「小野山」と呼ばれることが多かったと述べたが、実は夕霧巻本文にも「小野山」の語が見える。次の引用は、落葉宮からの手紙の返事を待つ夕霧のもとに、ようやく返事が届けられるも、それは侍女である小少将によって書かれた返事であった。しかし、その返事には落葉宮の手習の歌とおぼしき和歌が書かれた紙が添えられていたという場面である。

（夕霧は、小少将からの返事に添えられた紙に）そこはかとなく書きたまへるを、見続けたまへれば、

（落葉宮歌）朝夕に泣く音を立つる小野山は絶えぬ涙や音無の滝

とや、とりなすべからむ。古言など、もの思はしげに書き乱りたまへる、御手なども見所あり。

（新潮日本古典集成『源氏物語6』新潮社 一九八二年 夕霧・六六頁）
この和歌で落葉宮が声を上げて泣いている土地は「小野山」となる。あるいは、この「小野山」という語も、葛野郡「小野」が落葉宮ゆかりの地として考えられるようになった要素の一つであったかもしれない。

(16) 本論では『河海抄』や『山州名跡志』に『伊勢物語』の作品名しか挙げられていないため、あえて触れなかったが、同内容の話は『古今和歌集』（巻第十八・雑歌下・九七〇）にも見られるものでもある。

惟喬親王のもとにまかり通ひけるを、頭おろして、小野と言ふ所に侍けるに、正月に、訪らはむとてまかりたりけるに、比叡山の麓なりければ、雪いと深かりけり。強ひてかの室にまかり至りて、拝みけるに、つれづれとして、いともの悲しくて、帰りまうで来て、よみて、贈りける。

わすれては夢かと思おもひきや雪ふみわけて君を見むとは

（新日本古典文学大系『古今和歌集』岩波書店 一九八九年 二九一頁）
本論で「『源氏物語』の知識だけではない、『伊勢物語』ならびに『源氏物語』古注釈の世界を含めた総合的な知識」と述べたのは、右の『古今和歌集』のように、注記上には明記されていなくても、アタマの中では意識されていた可能性が高いものもあり、必ずしも特定の作品理解のみに限定できないのではないかと考えるからである。